

令和7度 長崎市自然環境調査報告書：陸上昆虫及び脊椎動物

長崎市自然環境調査委員 田 中 清

はじめに

筆者は、2015年の4月～9月にかけて川原大池の調査を行いました。それから約10年が経過していました。このたび、川原大池（外周道路及び隣接する地域、海岸を含む）の動物について、深川元太郎氏とともに調査することになりました。

1 調査期間及び方法

(1) 期間

2025年1月～12月（毎月2～3回の調査）の1年間です。

なお、1回の調査時間は4時間～5時間でした。

(2) 方法

昆虫については7つを実施しました。

- ①見つけ取り ②スweeping法
- ③叩き網法 ④エンジンブロア（吸引採集）
- ⑤石起こし ⑥灯火採集
- ⑦PT法（フィットホールトラップ）

脊椎動物については2つを実施しました。

- ①タモ網での確認 ②双眼鏡での確認



図1 灯火採集

2 調査結果

私が確認した陸上昆虫、脊椎動物（魚類、両生類、爬虫類、鳥類、哺乳類）のうち、特定種、外来種、南方系の種及び偶産種に絞ってお知らせします。

(1) 特定種

長崎市および長崎県、環境省のレッドデータリストに記載されている種です。まず、陸上昆虫は、ニホンホホビロコメツキモドキ、マメクワガタなど8種でした。爬虫類はスッポン、アオダイショウの2種、鳥類はホシハジロ、チュウサギほか3種を確認しました。

しかし、いずれの種でも確認数が少なく、今後も注視していく必要があるでしょう。次にいくつかの種を示しておきます（図2～9）。



図2 オオアメンボ



図3 ニホンホホビロコメツキモドキ



図4 マメクワガタ



図5 タマムシ



図6 メスグロヒヨウモン



図7 アオダイショウ



図8 ミサゴ



図9 ホシハジロ

(2) 外来種

人間の活動に伴って外国や他県から侵入し、長崎でも見られるようになった種です。昆虫はタイワンクツワムシほか6種、魚類がオオクチバス、ブルーギルの2種、両生類はウシガエル、爬虫類がアカミミガメでした。

確認数は、昆虫で少ない種もありましたが、その他の種は個体数がきわめて多いことが分かりました。特に問題になる種は、昆虫のクスベニヒラタカスミカメと特定外来種のオオクチバス、ブルーギル、ウシガエル、アカミミガメです。次に、確認したいいくつかの種を示しておきます（図10～15）。



図 10 タイワンクツワムシ



図 11 アオマツムシ



図 12 クスベニヒラタカスミカメ



図 13 キマダラカメムシ



図 14 ウシガエル（幼体）



図 15 アカミミガメ

(3) 南方系の種及び偶産種

南方系の種は、沖縄から鹿児島（先島諸島や南西諸島などに）に分布していましたが、近年分布地を拡大（北上）して長崎でも見られるようになった種です。クロマダラソテツシジミ、タテハモドキなど5種を確認しました。次にいくつかの種を示しておきます（図 16～17）。

偶産種は、布地が南方にありながら、偏西風や台風などによって偶然運ばれてきたと考えられる種です。アカギカメムシ、ルリウラナシジミを確認しました。2015 年には、リュウキュウムラサキ、アオタテハモドキなどの迷蝶が見られましたが、今回の調査では確認されませんでした。



図 16 クロマダラソテツシジミ



図 17 タテハモドキ

3 考察

2015 年にはなかったキャンプ場、炊飯施設が整備されており、湖畔に生えていたクヌギ、ヤナギ、シイなどの老木が伐採されていました。このため、2015 年に湖畔で確認されていたコムラサキやコカブトムシは、幼虫や成虫の餌や生活場所がなくなって、見られなくなっていました。一方、木道と東屋、スイレンやショウブなどの植栽は、2015 年にはすでに整備されていました。ここでは、多数のチョウトンボやマイコアカネなどが見られていました。しかし、現在では先に述べた 4 種の特定外来種によって幼虫が捕食されてしまい、まったく見られません。このように、昆虫では、見られる特定種の種類数が減少しています。

次に外来種について述べます。昆虫ではクスベニヒラタカスミカメです。この種は最近、市街地で確認され、クスの葉を枯らして樹勢を衰えさせています。川原でも確認されたことから、今後の動向を注意する必要があります。また、湖内に生息しているアカミミガメは非常に多い状態で、木道を歩いただけでも大小の個体を数 10 頭も確認できます。

水の中がどのような状態であるかは、調査をしていないのでわかりませんが、水面を観察するとボラが跳ねたりしています。海側の水門が開いており、満潮時に海水や海産生物の湖内へ移動や湖水の汽水化が進んでいるようです。

そして、調査中に実感したことは、池の中や周辺の外周道路及び林内など、いたるところにゴミが投棄されたままなっていること。さらに 2015 年にはほとんど見られなかったイノシシが増えて、堀跡、ヌタ場のみならず、調査中に会うこともありました。

このように、現在の川原大池にはいくつかの問題点があることがわかりました。しかし、これらを解消することは容易なことではないでしょうが、今後の川原大池の保全に向けた参考になれば幸いです。



図 17 ボラ（幼魚）



図 18 イノシシ（成獣）

最後に、新たな発見もありました。7 月の調査で、オオスミコガネグモ (*Argiope ocula* Fox 1938)

が採集されました。これは、長崎県初記録であったので、同行した山佐啓斗氏によって学会誌(KISHIDAIA, No. 128, Mar. 2026)に掲載されました。

謝辞

本調査あたっては、長崎市環境政策課と長崎市土木総務課の方々に調査の協力を賜りました。また、合同で調査した深川元太郎氏、カメムシ類の採集や同定にご協力いただいた安永智秀博士、さらに、採集用具をお貸しいただいた長崎西高等学校の長嶋哲也氏、夏から秋の調査に同行して採集に協力をいただいた佐賀大学大学院生の山佐啓斗氏、灯火採集に同行いただいた長崎市環境政策課の森崎一則氏にこの場を借りて、心よりお礼と感謝を申し上げます。